

人 事

最後に、蕃書調所出役の人事について述べておく。先に触れたように、一八五六（安政三）年正月二十二日に教授方・教授手伝の候補者が出された。第2表の候補者の顔ぶれをみると、多少の専門性を必要とした書物出役は幕臣やその子弟で占められているものの、教授職と教授手伝はすべて陪臣であることがわかる。また、幕閣の答申では、教授と教授手伝を合わせて五、六人程度の枠であったが、候補者は合計で九人である。これは、人手不足と認識した古賀が、敢えて教授手伝を三人割増して申請したことによる。この人事は、幕閣で審議され、四月四日に決定された。但し、教授手伝候補者の石井宗謙は他の候補者と折り合いが悪いとの評判で、松平肥前守家来伊東玄村の弟子原田敬栄に替えられた。教官の人事にあたって、人間関係が選考の重要な基準の一つにされていることは興味深い。また、書物出役の杉浦磯吉も理由は不明ながら外され、五人が任命された。さらに、六月十七日には「句読教授出役」として、設楽莞爾・杉山三八・村上誠之丞の三人と、大久保喜右衛門が「世話心得」となった。また、十一月十六日に教授手伝として近代的軍隊を構想したことで名高い村田蔵六（大村益次郎）、十二月二十九日に天文方和解御用出役の堀田備中守家来木村軍太郎と松平越前守家来市川斎宮が任命された。こうして、蕃書調所は、教授職・教授手伝・句読教授・世話心得の四種類の教官を備えて、業務を開始することになったのである。

六 蕃書調所の開校

開 校

蕃書調所の業務は、一八五五（安政二）年六月の異国応接掛四人からの意見書と、十一月の洋学所頭取古賀謹一郎



の構想書から判断すると、①洋書の翻訳、②洋学研究（芸事）、③翻訳・通訳・洋学研究者の養成、④洋書・翻訳出版物の検閲に大別される。この内、①②④の業務は開校を待たずに始められていたが、③の稽古所としての業務は、一八五七（安政四）年正月十八日の開校によって開始されることになる。

まず、一八五六年七月一日に、御目見^{おめみ}以上・以下の惣領・次三男や厄介に、自由に番書調所へ出仕して修行するようにと公示された。ただし、この段階では修行の条件として、経書・弁書又は講釈などの能力が求められた。また、陪臣等の修行については今後認可されるだろうとの見込みが述べられているだけで、当面は認可されなかった。陪臣の稽古が認められるのは、一八五八（安政五）年五月のことである。ただしこの時も、「両文典句読」、つまり蘭語のグランマチカとシntaxキスの素読の能力が条件であった。ようやく、「両文典句読」の条件は撤廃され、陪臣も希望するものならばだれでも稽古を受けることができるようになるのは、一八六二（文久二）年六月にまで下る。

さて、一八五六年十二月六日に稽古人が募集された。これによると「来正月中より番書調所御開き相成り候間、御目見以上・以下、次男・三男・厄介に至る迄、年齢に拘わらず勝手次第罷出、稽古致さるべく候、尤罷出で候以前、

六 蕃書調所の開校

短冊持参、同所玄関へ申し込むべし」とあり、七月とほぼ同様の条件で稽古希望者が募られた。ただ異なる点は、經書等の漢学の素養が条件からはずされたことである。これによつて、幕臣やその子弟は、年齢にかかわらず稽古を受けることができた。ここで、稽古希望者に持参させる短冊とは、次のような形式であつた。

何役歟
何御番歟
小普請歟
何之誰
組歟
支配歟

宿所
何之誰地面借地歟
何之誰方同居歟

何之誰

右、蕃書調所え罷出修業仕度奉願候

支何歳

(「蕃書調所規則覚書」原平三「幕末洋学史の研究」新人物往来社、一九九二年、六二ページ)

これは、本人が「幕臣」の場合の雛形である。「幕臣」の子弟の場合は、氏名の肩書に「誰惣領歟伴歟次男歟厄介歟」が加わり、宿所に「何誰何之誰一所」と記される。こうした短冊を提出すれば、その当日からでも稽古してもよいとの規定であつた。

いよいよ、一八五七(安政四)年正月十八日に、幕臣一九一人が生徒として出席して開校式が行われた。学則に相当する「蕃書調所規則覚書」によると、稽古は正月十一日から十二月二十日まで、五節句、八朔、盆(七月十三―十六日)は休業、稽古時間は自由で、出席と退出のときに記録所に申し出ればよく、欠席するときも産穢・忌中以外は特に断る必要がなかつた。稽古時間は、朝五ツ時(午前七―九時頃)から夕七ツ時(午後三―五時頃)であつた。後に、六月の午前中の稽古時間は、朝六半時(午前六時頃)―昼九ツ時(十一―一時頃)と改正された(二八六四「元

治元」年「開成所稽古規則覚書」「幕末御触書集成」第三卷、三〇二四号・「開成所事務」東京大学史料編纂所蔵。服装も、初日は麻上下と決められていたが、普段は「略服勝手次第」と自由であった。稽古の内容は「会読・輪読・素読」で、特に教科書の中に「兩文典」（和蘭文典前後編）と明記してあることから、蘭学のグランマチカとシンタツキスが必修項目であったことがわかるという。一八六四（元治元）年十一月からは、毎月十六日が講釈の日と定められている（前掲「開成所稽古規則覚書」）。なお、一八六四年二月、三月に翻訳の必携書で「稽古必用之書」で「銘々座右」になくなくてはならない書として、「和蘭学彙」二〇冊を代金一四〇両で購入する願書が頭取から上申されている。しかし、すでに四〇部も備えている上、高価なためか、許可は下りなかった（「開成所伺等留」）。

稽古人は、日々百人程度出席し（前掲「小田又蔵蕃書翻訳御用に関する書類」）、二月に入っても毎日一〇人ずつ入学者があつたといわれる（前掲原平三「幕末洋学史の研究」）。稽古の段階は、句読（素読）↓輪読↓会読（寄り合つて、数人で読み討論をする）であつた。句読が終わると、教授の講釈も少し行われたが、専門の学科があるわけではないので、「教授」というものではなかつたという（加藤弘蔵「蕃所調所に就いて」「史学雑誌」二〇一七、一九〇九年）。初心者の句読の様子は、広い講堂（大広間）に座っている句読教授の机の前に来て、読み方を学ぶというもので、句読教授一人当たりの生徒はおよそ三〇人程度で、一人一時間位ずつ教えたという（赤松則良述、赤松範一編「赤松則良半生談」東洋文庫、一九七七年）。

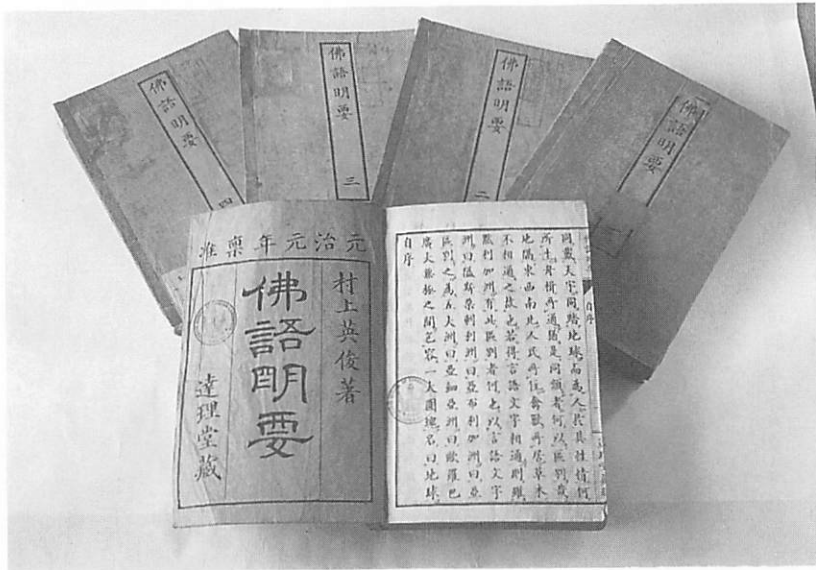
蕃書調所の機構

このように、開校当初の蕃書調所は蘭学を主とした語学習得の初歩的な訓練が中心であつたが、しだいに学問・教育の分野の領域を広げていく。頭取古賀勤一郎は、一八六〇（万延元）年五月に、「書籍観読」ばかりでなく、教師

の心得のある学科、とくに言語学・精錬学・画学を教授することの必要性を唱えている（『開成所伺等留』）。一八六二（文久二）年までに開設された分野を掲げると次の通りである（『日本教育史資料 七』一八九二年）。

- ① 絵図調方 一八五七（安政四）年七月十三日
- ② 活字方 一八五八年五月二十二日
- ③ 翻訳方 一八五九年十二月七日
- ④ 精錬方 一八六〇（万延元）年八月八日
- ⑤ 英学 同年 八月二十三日
- ⑥ 書籍調 同年 十一月五日
- ⑦ 筆記方 同年 十二月二十七日
- ⑧ 仏蘭西学 一八六一（文久元）年六月十日
- ⑨ 西洋書画 同年 六月二十九日
- ⑩ 物産学 同年 九月十九日
- ⑪ 数学 一八六二（文久二）年二月十一日
- ⑫ 独乙学 同年 五月八日
- ⑬ 器械方 同年 五月十二日

これらの中には、稽古人を募集し教官が教育を行う部局（⑤⑥⑧⑨⑩⑪⑫）と、稽古人を置かず教育活動より研究を主眼とする「方」のつく部局（①②③④⑦⑬）の二系統があったことを指摘できる。これらは、現在の「学科」と「研究所」に相当するものと考えられるので、以下それぞれに分けて述べていくことにする（以下の「学科」系



『仏語明要』（東京外国語大学図書館所蔵）

統・「研究所」系統』の記述は、特に断らない限り、前掲原平三「幕末洋学史の研究」・宮地正人「混沌の中の開成所」「学問のアルケオロジ」(東京大学、一九九七年に依っている)。

「学科」系統

学科には、教授以下の教官が配置され、稽古人の入学が認められていた。

はじめに、語学関係についてみていこう。先に述べたように、江戸時代に公式に使われていた西洋語は蘭語であった。しかし、開港後は外国人との貿易に関する談判に英語通詞が必要となるのは必至であるにもかかわらず通詞不足であり、また一八五八(安政五)年の修好通商条約には、調印後五年間は外交文書に日本語又は蘭語の訳文を添付できると記されているが、その後は訳文なくアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスの各相手国の言語を用いることになっていた(前掲「開成所事務」)。そのため、英語を中心とする通詞養成の必要性



『英和对訳袖珍辞書』（東京外国語大学図書館所蔵）

が高まることになる。

まず、英語については、古賀謹一郎が尽力の末、一八五八（安政五）年十月二十九日に英語に堪能なオランダ通詞の堀達之助^{ほりたつのすけ}を出獄させ、十二月七日に蕃書調所の「翻訳方」に任命した。堀は、下田奉行通詞として勤役中の一八五五（安政二）年に、ドイツ人ルドルフの外交文書を独断で処理した罪で入牢中であった。堀は編纂主任として英日辞書の翻訳をてがけ、一八六二（文久二）年十一月に『英和对訳袖珍辞書』を刊行した。また、一八六〇（万延元）年八月には、蕃書調所の正科がそれまでの蘭語から英語に変更され、同時に教員の充実が図られる。一方、学ぶ側の需要もさらに増し、一八六二年十二月の時点で、稽古人百人中六〇―七〇人は英学修業といわれた。英学教員の中で出色であったのは、箕作麟祥^{りんしょう}である。麟祥は、地理学者箕作阮甫の女婿になった箕作省吾^{しやまご}の子で、後に明治政府の下で法典整備に力を尽くした人物である。蕃書調所で教鞭をとりながら、家塾で教育に従事したとされるが、任命されたときは十五、

六歳であった。

次に、フランス語は、松代藩医村上英俊（なほと）が一八五九（安政六）年三月に教授手伝出役として入所し、翌年著書「蘭西詞林」を増補し、さらに一八六四（元治元）年に家塾達理堂から「仏語明要」全四巻として刊行した。蕃書調所でのフランス学は、一八六一（文久元）年六月十日に林正十郎と小林鼎輔が教授手伝出役となってから本格化する。なお、英仏語については、年若で人柄のよい者を居留地に派遣して通訳の勉強をさせることも古質によつて提案され、実現されることになった（前掲「開成所事務」）。

これに対して、ロシア語は遅れをみせる。ロシア語に堪能な小野寺丹元が一八五九年三月に教授手伝出役として入所するが、仙台藩医として抜擢されてしまう。また、ロシア語の入門書「魯西亜字筌」を刊行した榊令輔は、一八五八年五月に入所したが、活字御用出役として後述する活字方担当であった。ロシア語修得が本格化するのには、一八六六（慶応二）年に市川文吉ら五名がペテルブルグに留学する頃からであった。

その他、ドイツ語は一八六〇（万延元）年七月に通商条約締結交渉のために使節団が来日してから、その必要性が認識され、八月七日に蕃書調所教授手伝出役市川斎宮と、一八七七年にのちの東京大学初代総理加藤弘（ひろゆき）之にドイツ語と辞書編纂事業の命令が下った。そして、一八六二年五月八日に白戸兼吉郎と団源次郎が独乙学句読教授出役として任命された。

以上のように、蕃書調所における語学修得と外国研究は、外交政策と密接に結びついた形で幕府の要請によつて進められることになったのである。

その他の学科には、数学科と画学科がある。数学科は、一八六二年二月十一日に神田孝平が教授出役に就任したとくに始まる。稽古人は海陸軍の修行生が多く、一八六六年三月頃には一五〇―一六〇人位いたという。画学について

は、絵図調方とあわせて後述する。

「研究所」系統

審所調所内の部局として設けられた「方」は、研究活動が中心のいわば研究所である。職員も「教授」以下の教官身分ではなかった。また、稽古人も募集していなかった。

まず活字方とは、審書調所の印刷・出版部門を担う役職である。「活字所」(「官板所」とよばれる部局では、一八五八(安政五)年三月二十二日に活字方に就任した榊令輔が中心となって、活字印刷の技術の修得が図られ、出版活動が行われた。それまで日本で行われていた印刷は、木版であったため、活字印刷の道具は長崎から輸入され、横浜居留地の印刷業者から技術伝習を受けるなどし、一八六七(慶応三)年には職人も雇用されるようになったという。

ここで印刷された語学の教本には *Familiar Method* (一八六〇年)、『*English Grammar* (一八六二年)』、『*独逸語文典* (一八六三年)』、『*仏蘭西会话篇* (一八六七年)』などがあり、所内向けばかりでなく、国内に対して語学教本・辞書を供給する役割を果たした。

これに関連して、筆記方における新聞の開版事業がある。これは、筆記方の業務の一部であったとみられ「教授方、海外諸種新聞を口訳し、筆記方これを筆記したるなり、嗣後此新聞を活字にして世に布けり」(前掲「日本教育史資料七」、六六六ページ)とあるように、教授らが翻訳した新聞を写して活字にしたことがわかる。刊行された「バタビヤ新聞」とは、バタビヤ和蘭総督府の機関紙 *Jausche Courant* の「外国記事」という国別報道記事の翻訳であった。

次に、絵図調方は、地図や描画作業を担う部門である。すでに一八五六(安政三)年に、地理学者で地図制作に関

わっていた天文方手伝出役の柴田収蔵しばたしゅうぞうが蕃書調所教授手伝に任命されていたが、翌一八五七年七月十三日に円山派の画や洋画を学んだ画家の川上冬崖が絵図調出役に任命され、絵図調方が置かれ、翌五八年には前田又四郎が加わった。蕃書調所には、西洋芸術の稽古人も来学しており、頭取の古賀謙一郎は一八六一（文久元）年五月に画学専任の教授方二名を幕府に申請した。これに対して、幕閣では反対する意見も強かったが、結局美術としての画学ではなく、測量図、物産学、造船学などの基礎となる実学として、画学出役二人の任用を許可され、同年六月に川上と前田が画学出役に任命されることになった。

精練方は、小林祐三が一八六〇（万延元）年八月に精練方出役に任命されたことに始まる。当初は、専任職員の中に専門的知識をもつ者がなく、専門家は「雇」という身分で雇用されていたため、精練学研究は振るわなかった。そこで、古賀は一八六一年五月に精練学振興のため、専門家の待遇改善を上申し、七月から「雇」を「手伝出役」として任用した。そして、ようやくこの頃から薬品の製造などの研究が本格化していったのである。精練方は一八六五（慶応元）年三月に学科となり、精練学も「化学」と呼び換えられ、職員も教授出役、教授手伝出役に昇格した。稽古人は四―五人程度であったといわれ、元素の名称を暗記させることから始め、化学の知識を与えたり、語学力のある者には原書を読ませ翻訳させたりした。一八六七年には、化学研究の充実を図るために、オランダ人ガラタマを長崎の精得館付属分析窮理所から招聘したが、幕府が倒壊したため、その成果は開成所で発揮されることはなかった。なお、ガラタマの招聘については、「御雇外国人」の先駆として後述する。

物産方とは、一八六一（文久元）年四月に頭取古賀謙一郎と頭取助勝麟太郎かつらぎ（海舟）が、今後の貿易のために「動物・金石類夫々見本これを取り、其品の善悪高下等明白に見極」めさせる必要からその創設を幕府に建言したことによって置かれた。同年九月十九日に出役に任命された伊藤圭介は、シーボルトの教えもうけた本草学者である。

器械方は、一八六二年五月十二日に出役一人が置かれたのを初出とするが（『日本教育史資料 七』）、すでに一八六〇年十月から市川齋宮が器械掛に任命されていた。器械方の役割は、電信機器や写真機器等の操作に習熟、製造することであり、製造にまでは至らなかつたという。ペリーが一八五四年に將軍に贈った蒸氣機関車の模型や、一八六〇年に来日したプロシア使節が贈った写真機や電信機などの操作研究が行われていたのである。

蕃書調所の移転と呼称の変更

これまでみてきたように、蕃書調所の研究・教育の分野の拡充は、時代の要請によるところが大きかつたが、その建物の移転や呼称の変更も、時の政治情況に左右された。

まず、蕃書調所の移転についてみていこう。先述のように、蕃書調所は九段下の竹本図書頭屋敷と隣接する大沢右京大夫屋敷を収公して開校されたが、一八五七（安政四）年九月から翌五八年正月まで、アメリカ総領事ハリスが江戸滞在中の宿舎に宛てられたため、九段上表六番地の和学講談所の一部に間借りすることになった。その後、ハリスから返還された蕃書調所は、校舎を修復して、一八五八年正月十一日に開校式を行った。出席した生徒は一五〇人の幕臣であつたという（『日本教育史資料 七』、六六五ページ）。

ところが、一八五八年四月二十三日に大老に就任した井伊直弼は、阿部正弘―堀田正睦時代の政策を否定し、蕃書調所を移転、縮小した。移転先は、御台所町永井玄蕃頭屋敷地（現在、千代田区三崎町二丁目）である（『前掲図1③』、嘉永三年版切絵図では松平河内守屋敷となつている）。しかし、一八六〇（万延元）年三月三日に、井伊直弼が桜田門外の変で暗殺されると、政権は安藤信正に移り、公武合体路線がとられるようになり、蕃書調所は、翌一八六一（文久元）年五月五日に一橋外四番原五千坪の空地に護持院原（現在、千代田区一ツ橋二丁目、一橋講堂・如水会

館・共立大学)「前掲図1④」に移転し、拡大されることが決定された。一年かけて校舎の建設が進められ、翌一八六二(文久二)年五月十八日に移転、同月二十三日から開校された。この時、蕃書調所という名称も、「洋書調所」と改称されたのである(前掲『幕末御触書集成』第三巻、三〇一六号)。ここに、外国に対する夷狄意識を含蓄した「蕃書」という表現は改められることになった。

ところが、攘夷勢力が強くなると、幕府は「西洋」「洋」という言葉を排除するために、一八六三年二月二十四日には「西洋医学所」を「医学所」と改め、「洋書調所」も同年八月二十九日に「開成所」と改称した。なお、洋書調所御用の林大学頭らは、洋書調所の任務を西洋書「翻訳」に留まらず、広く「天文・地理を始め百工の技芸何れも此場所にて総括に相成り」、「物理考究器械製造」を専務とすることと捉え、それには易経繫辭伝にみられる「開物成務」の略である「開成」ということばがふさわしいと、改称の理由を説明している。しかし、むしろ攘夷勢力の台頭という社会情勢への、賢明な政治的対応であるとみることが妥当であるといわれている(前掲宮地正人「混沌の中の開成所」)。

七 激動する政治情況と開成所の役割の変化

教官の幕臣化

多くの開成所教官は、將軍の直臣(幕臣)ではなく藩士^{しんし}陪臣で、本役と兼務する「出役^{しゅつやく}」という身分であった。こうした陪臣によって教官の主要部分が占められているという事態は、以下の三つの点で問題を生じた。第一は、一八六二(文久二)年閏八月に参勤交代制度が緩和され、国元に帰国する大名が増えたため、江戸における藩士の数が